

報告講演「地域に根差した県立普通高校の実践と課題」

石飛 憲



○石飛 憲（島根県立横田高等学校主幹教諭）

それでは、よろしくお願いします。御紹介いただきました島根県立横田高等学校の石飛と申します。本日は、私の現在勤務しております横田高校の実践と課題についてお話ししたいと思いますが、先ほどお話がありました御三方の話を参考にさせていただき、若年層の人口流出について考える一つの材料になればと思います。よろしくお願いします。

今日は、地域に根差した教育活動、それから、横田高校の進路指導、こういった実践と課題を主に話していきたいと思います。

先ほど紹介いただきましたが、私は雲南市の出身です。現在も雲南市に住んでおります。横田高校の勤務は2年目ですが、普通科高校には、通算で16年ほど勤務をしております。そこで進路指導と教科指導などを行ってきました。先ほど来話がある中でいいますと、私は島根県雲南市の出身で、そして島根大学、その後大学院も行き、その後島根県で教員をしていて、ずっと島根県で過ごしています。

横田高校について

まず、横田高校について説明します。県内の方は御存じかと思いますが、島根県の東部の山の中にあります。この位置です。岡山、広島、鳥取との県境にあります。学校の規模ですが、現在はもう全校生徒が200名ほどに減っています。昨年の春のところで定員が減って、30名のクラスが3つ、90人定員になりました。毎年70名程度の入学生があって現在約200名の在籍生がいます。吉川先生の話の中に出てきましたしまね留学も行っており、現在28名が在学しております。そういった生徒を受け入れるために寮があり、64名の定員のところに今、36名が暮らしているという学校です。

学科は普通科です。中山間地域の普通科の学校の内容やコース、カリキュラムは、横田高校とほぼ同じようなところが多いと思います。1年生で共通のカリキュラムを受講し、2年生、3年生ではコースに分かれていきます。3クラスのうち1クラスが、今日話題になっております大学進学を目指すクラスということになります。その1クラスの中で文系と理系とに分かれていきます。就職から進学まで様々な進路を選んでいく生徒がいる学校だという認識でお話を聞いていただければと思います。

地域に根ざした教育

では続いて、タイトルにありましたが、なぜ、今地域に根差した教育活動なのかということをも簡単に説明したいと思います。文部科学省のほうで地方創生に資する高等学校改革を進めております。この中で、高校生が地域課題を探究する、勉強することで、高等学校にとって、そして地域にとってよりよい効果があると考えているのです。

少し詳しく次のスライドで見ていきます。地域にとっては、地元地域を高校生が知ることによって地元への定着やUターンが促進され、地域の活動に高校生が参画することで地域活力の向上へ貢献してくれるだろうというのが狙いです。高校にとっては、地域における学びを通じた探究的な学びを実現でき、学校の中だけでない多様な社会体験が行えます。これがこの改革の目指すところです。

この文部科学省の方針というのは、最初、吉川先生のお話にもありました島根創生計画の「島根を愛する人づくり」とつながります。これは、学校と地域の協働による人づくりを進め、地域協働スクールを実現し、地域資源を活用した教育を推進し、島根を愛する多様な人づくりをするということです。吉川先生のお話にも出てきました高大連携の推進等もこの中に含まれています。こういったことを進めて地域への愛着の醸成を行い、同時に生徒自身の未来を切り拓くための生きる力を育成するというものです。このことが島根創生計画の中でうたわれています。

この方針は、県立高校の魅力化ビジョンの中にも同じようにうたわれています。つまり、生きる力の育成と地域への愛着の醸成ということです。

ちなみに、もう1つ、横田高校があります奥出雲町には「18歳で目指す子ども像」というのがあります。赤字のところだけ読みます。「奥出雲町への愛着と誇りをもち、自らとふるさとの未来を切り拓こうとする子ども」18歳でこういった子どもを育てたいと考えています。これも先ほど来出てきています地域への愛着の醸成ということを目指す子ども像であると考えられます。

このような背景があって、横田高校が地域との連携による教育活動においてどのような実践をしていて、どのような課題があるかということをお話ししたいと思います。

横田高校の地域教育

横田高校の魅力化ビジョンの中では、「四方よしの人づくり」を掲げています。地域の未来に貢献する人材の育成、つまり、地元地域の未来に貢献する人材を育成したいということです。育てる生徒像について一つ一つは取り上げませんが、その中身は未来を描き、未来を

切り拓き、ゆくゆくは地域を支えられる人材になってほしいということです。先ほどの文科省の図の中にもありました。地域の側では、コンソーシアムというものをつくって、地域と学校が連携して一緒に学校づくりを進めていくというビジョンを掲げています。始まったばかりというところです。

先ほど言いましたように、学校側はこれで生きる力の育成をしたい。未来を切り開いていく力を持った人材を育成したい。地域としては、地域への愛着の醸成、これを生み出して、将来地域を支えてくれる人材が欲しいと、つくりたいというところです。

では、具体的にどのような教育活動を行っているかというところを見ていきたいと思えます。総合的な探究の時間、地域で学ぶ教科学習、そして、課外活動での地域交流活動などを行っています。これらを行って、先ほど出てきました地域への愛着の醸成と未来を切り拓く生きる力の育成をしていくのが大きな目標です。ただ、今日のテーマと関わる部分でいいますと、地域への愛着の醸成によって、流出する人口をどのように止めることができるのか。あるいは、一度出ていった若者をもう一度地域に呼び戻せるのかというところがポイントになると思います。

総合的な探究の時間では、3年間を通して探究学習を行って地域を知り、その活動を通して力を身につけていき、それを自分の進路実現にも生かしていく活動をしています。より地域に密着して地域の課題を知っていくために、あるいは解決していくために、昨年、奥出雲町が町の10年先まで考えて作成した『第2次奥出雲町総合計画』をテキストとして使用することにしました。生徒一人一人に持たせ、奥出雲町がどのような課題を抱えて、どのようなプランで総合計画を進めていくのかということを理解し考える学習を取り入れたいと思っています。

地域で学ぶ教科学習では、数学や理科の授業で地域に出かけて、実際にどんなふうに学んだことが使えるのかということなどを学びます。例えば、理科では、たたら製鉄に由来する奥出雲町の循環型農業について科学的な観点から考えてみようという学習です。ちなみにこの循環型農業については、すでに日本農業遺産に認定されており、さらに今世界農業遺産の申請を行っているところです。

続いて、課外活動についてです。地域交流活動としていろいろな活動に生徒が出ていって参加しています。例えば、地元で開かれる青空市です。そこに出かけていって高校生ショップを行っています。また、奥出雲町からの要請もあり、奥出雲町のカレンダー制作に協力しました。生徒が写真を撮り、そこに生徒が言葉を添えたものを作って奥出雲町の全戸に配付しました。高校の活動が奥出雲町の人にも見てもらえる活動です。

今年度から始めたことが、地域活動を部活動単位でやることです。現実には、地域活動を

やりましょうといっても、生徒はなかなか自分からボランティアに出かけたり、地域活動をしたという事は、実は少ないんです。中心になっているのは、どうしても鳥根県以外からいわゆるしまね留学で来た生徒です。やはり田舎がいいといって来た生徒たちですので、そういった生徒たちが中心になって動く例が多いのです。なかなか地元の子たちは地域の活動には足が向きにくいというところがありますので、部活動単位で年1・2回、どこかに出かけていきましょうということで、募金活動やサマースクール、地区の文化祭などに出かけていっています。今年度やってみて、地域の方々に非常に喜ばれているという点で、地域に貢献できている部分だと感じています。

また、先ほど申しましたしまね留学で県外から入学した生徒についてですが、県外から来た生徒は、日曜日、部活動等なければ時間があります。その時間を使って、地域の方と食事会をするなどの地域交流をしています。今年度の初めには、高校のすぐそばにある稲田神社を、その地域の人と一緒に清掃活動をしました。また、夏には蛍が出るのでということで地域の人の誘いで蛍を見に行き、その後スイカを食べさせてもらうということもありました。地域との交流は寮生のほうが活発に行っているという傾向があります。

以上、横田高校の地域交流活動について説明しました。このような活動を進めていることを知っていただけたらと思います。

地域教育活動の効果は

そうしますと、続いてこういった活動における課題についてお話ししたいと思います。

横田高校で行っている活動がはたして地域への愛着の醸成につながっているのかということです。結果的にUターンとか、あるいは地元定着率を増やすということは、なかなか難しいことですし、もう一つは、成果が測りにくいというところがあります。

今、鳥根県の高校では、6月に魅力化アンケートというアンケートを実施していますが、その中の1つの項目を取り上げてみました(図16)。その回答の肯定的評価の割合の各学年の経年の変化です。真ん中が今年の3年生になりますが、実は、今年の3年生と2年生は、昨年の6月調査で、「自分の今住んでいる地域で働きたいと思う」という項目のポイントが非常に低かったんです。この原因が何なのかというところは非常に難しいところがありますが、1つ考えられることは、新型コロナウイルス感染拡大の影響で地域との連携活動があまりできなかった年であり、地域にほとんど出られなかったというようなところがあります。もしかしたら、それが関係しているのかもしれませんが、もしそうであるならば、地域との連携には意義があるのかもしれませんが、ただ、これは推測ですのではっきりは分かりません。

横田高校 魅力化アンケートより（毎年6月実施）

Q. 将来、自分のいま住んでいる地域で働きたいと思う

肯定的評価割合の各学年の変化

入学年度 \ 学年	1年	2年	3年
2017年度入学生	データなし	54.3%	54.4%
2018年度入学生	50.4%	51.4%	55.1%
2019年度入学生	42.3%	46.2%	43.2%
2020年度入学生	52.4%	38.7%	
2021年度入学生	47.0%		

2019年度入学生
R4年1月実施
53.3%にUP

新型コロナウイルス
の影響で地域との連
携活動が活発にでき
なかったためか？

地域との連携に
意義？

※肯定的評価・・・「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」の回答

今後 検証が必要

図 16

実は、先般1月に、今年卒業する3年生に同じ質問を、ほかにもアンケート項目と一緒にしてみました。そうしますと、53.3%と急上昇しました。これについては、毎年、今までは3年生の最後には調査していませんでしたので、どのように受け取るべきものかはよく分かりません。実際に、もう地元に進路が決まった子もいます。それをどのように判断するかについては注意が必要です。しかし、こういった数字が出たことは非常にうれしいと思っています。続けて今後この項目で調査していき、検証していきたいと思っています。この数値のアップの原因の可能性として1つ付け加えますと、今年の3年生の総合コースでは2学期の就職や進学先が決定したあとにこれまでやっていなかった地域と連携した活動、地域の課題について考える活動をしました。もしかしたらそれも影響しているのかもしれませんが。

では続いて、進路指導の実践と課題についてです。これが今日の話題になっているところです。横田高校の進路はおよそ4分の1が就職、4分の3が進学です。その進学のうちの半数以上は国公立大学や私立大学、短大等に進んでいきます。では、卒業時に横田高校の生徒がどの程度県外に出ていくのかということを見ていきます。

直近の3年間でまとめています。249名が進路決定をしていっています。全体では県内が47%、県外が53%です。就職、進学全て合わせた割合ですが、それでも半数以上が県外へ出ていっているというのが実際です。ちなみに黒字で書いてありますのは奥出雲町内に残った生徒です。全部で44名、全体の18%が町内に残っています（図17）。



進路実績 3年間 (2019~2021) 県内外別割合

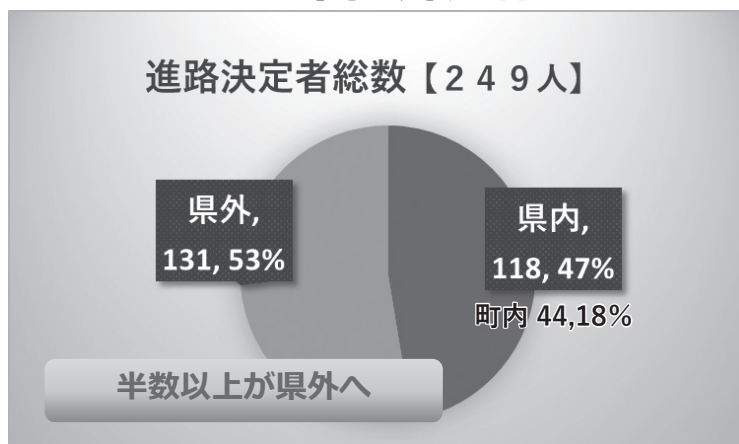


図 17

男女別も調べてみました (図 18)。こうしてみますと、女子のほうが県外に出ていく割合が若干多いことが分かります。女子のほうは57%、男子は県内に残る生徒が多くなっています。町内についても男子のほうが残る生徒が多いことがわかります。



進路実績 3年間 (2019~2021) 男女別 県内外別割合

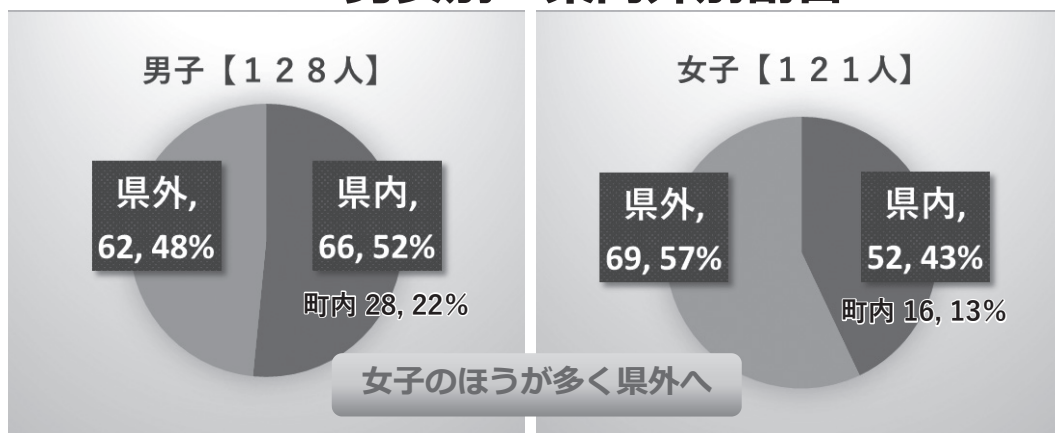


図 18

つぎは進路先を3つの種別に分けてみました（図19）。右上のところに大学、短大108人とありますが、この割合でいきますと、県内に残るのは16%、そして、県外が84%という数字です。町内には大学、短大ありませんのでもちろんゼロです。この数字は、先ほど石田さんが報告された、鳥根県の大学に進学する生徒がこういった割合かという結果と合致していると思います。専門学校等に進学する生徒については、県内が若干多いということになります。奥出雲町にははりハビリの専門学校、デザイン専門学校ありますので若干名町内にも残っています。

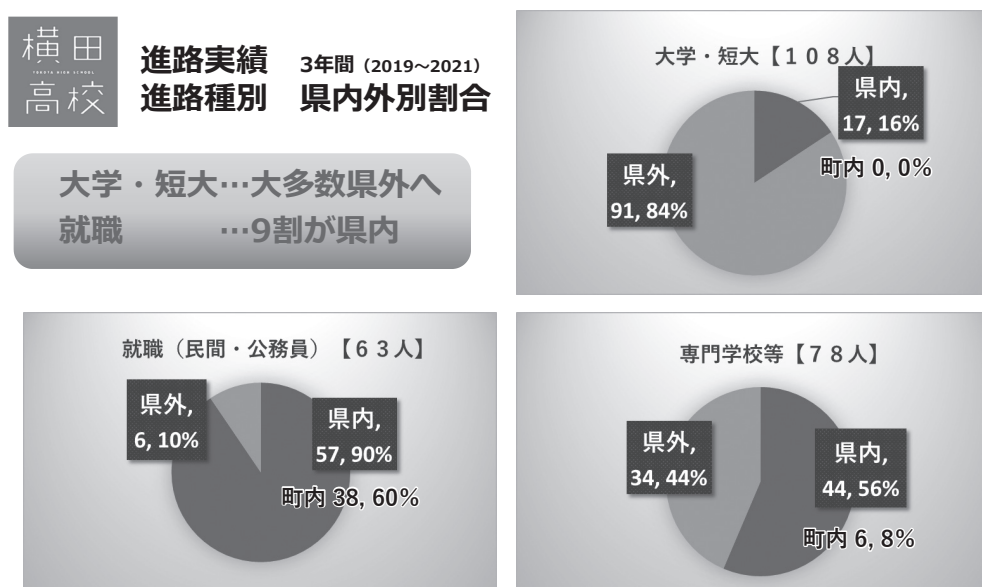


図19

就職のほうを見ますと、これは吉川先生のお話の中にありましたが、今は、この20年ぐらいですが、だんだん地元就職の傾向が強くなっています。以前は都会へ住み込みで就職する生徒がたくさんいましたが、ほぼ地元で就職するというのが現在の流れになっています。なかなか住み込みで生活が成り立たないというのが一つの要因でもあると思いますし、県内志向が強まっているというのも一つの要因だと感じています。

続いて、県内大学との連携についてです。これも今まで話に出てきました。鳥根大学がへるん入試などを、鳥根県立大学が連携校入試などを進めていらっしゃいます。それと一緒に高校も取り組んでいるところです。横田高校でやっているところ、これは恐らく県内の高校、ほぼ一緒だと思いますが、大学の説明に来ていただいたりとか、あるいは総合的な探究の時

間での地域課題解決学習にアドバイザーをお願いしたりしています。実際、今年度も鳥根県立大学のほうに行って、そこでアドバイスをいただきました。その前年は横田高校に県立大学の先生方にアドバイザーとして来ていただきました。それから大学見学も実施しています。今年度は鳥根大学のほうに見学に行かせていただきました。

先ほど言いました高大連携入試、へるん入試ですが、これによる進学は毎年数例です。今年も数例でした。これが横田高校の実態です。

高校がもっと地域に目を向けていく

実践の現状について説明しましたが、次は課題についてです。高校での進路指導は基本的に本人、保護者の志望と学力、こういったものを重視して指導していきます。そのため、学校としては、やはり本人、保護者の意向というのを重視することになります。先ほど来、話題になっております大学、短大への進学については、学力があればそれぞれの力に応じて県外の難関大学、あるいは国公立、私立大学。地元大学、つまり、鳥根大学、鳥根県立大学への合格が難しければ、県外の地方大学であるとか私立大学へ進学していきます。鳥根県内には私立大学ありませんので、鳥根大学と県立大学に入れぬ学生については、学力が足りないということであれば他県に出ていくしか仕方がないというのが現実です。専門学校についても、基本的には県内でいいのではないかという話はしますが、あくまで本人、保護者の志望で県外に出ていくということもあります。

先ほどの高大連携ですが、これによって地元大学への進学が増えているとはなかなか言えないと感じています。私は20年以上進路指導携わっていますが、鳥根大学や県立大学に推薦入試や連携校入試等が始まって、そのことで、鳥根県内の大学を受ける生徒が増えたかといわれると、特別増えたというような実感はありません。これはあくまで実感です。もう1つは、これまで進学指導に長く関わってきましたが、現段階で横田高校で行っている進学指導のスタイル、考え方というのは、以前と大きく変わってきたかといわれると、そう変わってはいないと感じています。学力がこの生徒はこれぐらいあるから、この大学だよなと。ここなんかどうかなというような提案をして、保護者、本人の意向で決めていくというような形です。それが現実だと思います。

そうしますと、今日のテーマについてです。大学、短大、専門学校に進学する生徒について、県内への進学を増やし、進学した後に鳥根に帰ってくるためにどうするのかということですが、高校の指導でできることは、先ほど出てきた、地域への愛着を醸成するということです。地域と連携した教育活動を充実していくということが一つあると思います。それから、

進学指導の考え方を少し変えていく。ただ、このためには、本人、保護者、地域の意識の変容が必要だと感じます。やはり地域の人が高校をどう見るかということです。今年は国公立大学に何人合格したのというのは、やはりこれは地域の評価としてあります。どういった大学に合格したのと。かく言う横田高校も学校案内にはやはり、いわゆる旧帝大に合格した生徒が載っているところにそのことが表れているのではないかと思います。そういった実績が上げられますよとアピールしています。これは、やはり地域や保護者の期待です。もちろん教員の側にもそういう発想があります。そういう進学指導を受けてきた教員ですので、やはり同じような発想でやっているということが実際だと思います。

生徒は夢や希望をかなえたいとか、自分の力を試してみたいということがあると思います。これは当然です。広い世界へ出てみたいということもあると思います。そのときにそれを、夢や希望を県内でかなえるのか、県外でかなえるのか、どこでかなえるのかということになります。この考え方というのは、これは私見になりますが、恐らく、周囲の大人や地域の考え方がかなり影響しているのではないかなと考えています。だから、この社会や世間の考え方が変容していかないと、この流れというのはなかなか変わらないというのが実際なのではないかと思います。

生徒数が減少する高校をどうしていくのか

横田高校についてももう少し話をさせてください。今置かれている状況が生徒数減です。かなり減っています。平成25年には入学者数が100名以上いたのが、去年の春が66名です。今の1歳、2歳あたりの奥出雲町内の子どもの数を見ると、もう60名を切っている状況です。しまね留学で県外からも生徒は来ていますが10名程度ということになります（図20）。

それを考えますと、生徒数が減ってクラスが減って教員が減っていきます。それに対してどのように対処するかといいますと、しまね留学の生徒を増やして学校規模を維持するのか。それとも、小規模化を見据えた学校づくりを進めるのかという問題になってくると思います。

しまね留学の効果は、あると思います。多様な価値観に触れたり、先ほど言いましたように、地域活動を率先してやってくれたりというようなところがあります。クラスの維持等にもプラスになっていると思いますが、課題としましては、教員の負担がやはり出てくることです。募集活動や県外生の疾病やトラブルの対応です。現在のような感染症があると非常に負担が重くなります。もう1つの課題は、しまね留学で鳥根県に来てくれる生徒たちが卒業して果たして鳥根県に残ってくれるのか、あるいは関係人口としていろいろな貢献してくれるのかということです。横田高校の卒業生でいいますと、現在1名県内の専門学校に進学し

横田高校入学者数と奥出雲町内の生徒児童数

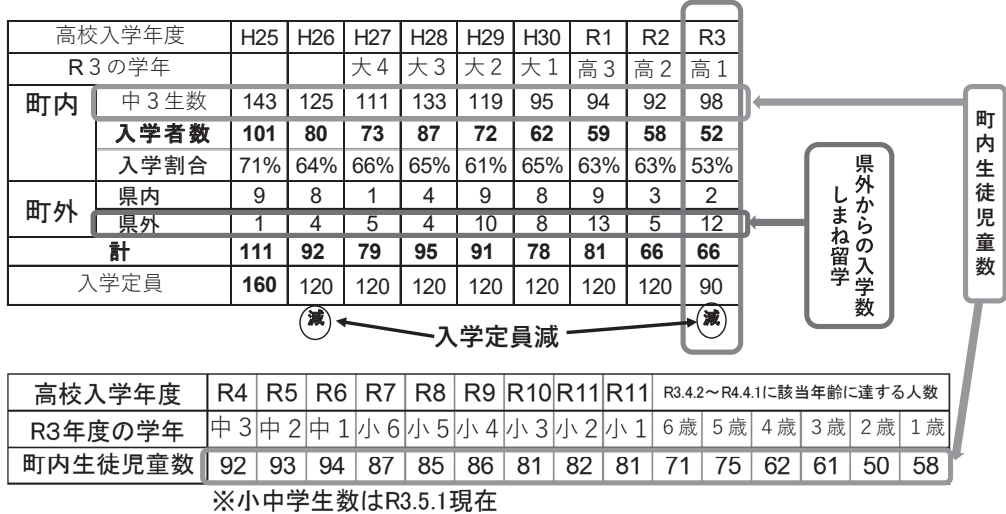


図 20

ている生徒がいます。その生徒が卒業後どうするかは不明です。まだ在学中です。

しまね留学での入学生を増やしていくということになると、寮の定員を増やさなければいけません。施設が必要です。これは億単位のお金が必要になります。それから、県外留学受け入れを進めている学校は増えてきていて競争が激化しています。しまね留学でスタートして全国に広がっていますが、これもなかなか対応が難しくなっています。それから、県外から入学する生徒が、横田高校にとって本当に来てほしい生徒なのかという点も課題です。この辺りの募集に関する課題もなかなか難しいものがあります。

では次に、小規模化を見据えた学校づくりを進めるにはということについてです。これは最初に話しましたが、高校と地域が協働体制を構築してどんな学校にしていくのかというのが大事であり、今学校でも進めているところです。島根県の場合、教職員というのは数年単位で異動します。大体4年から長くて8年です。しかし、横田高校の場合にはかなり循環が激しいです。もちろん管理職も目まぐるしく替わります。そうすると、長期的な視点で学校づくりをするには地域との協働が不可欠で、地域の視点がやはりどうしても大事になるところです。

一通り話してきましたが、最後に、たまたま私が最近読んだ本で『地域再生入門』という本の一節を紹介します。都会へ出ていく若者について書かれている一節です。最後の黄色いところだけ読みます。「結局大人たちが諦めてるんだよね」というところが非常に胸に刺さっ

た言葉です。私も、田舎に住む人間として都会へ出ていくのを仕方がないと思ってしまふところがあるように思います。それをどうしたらいいのかというところが課題だと思います。先ほど話しました、高校に関わる大人の意識の変容と、高校と地域の協働による特徴ある学校づくりというのが今後必要になってくるのではないかとこのころで、私の話を終えたいと思います。

すみません、長くなりました。以上です。（拍手）

○田中

石飛先生、どうもありがとうございました。